

わたしたち団塊の世代は、喫茶店の文化が身にしみついていると思う。10代、20代のころ、ひんぱんに喫茶店に出入りして、そこで友人知人と打ち合わせ、無駄話をし、たまにはあこがれの人を前に緊張し、葉書や封書をしたため、複数の仲間でわけもなく盛り上がり、ときには窓越しに通りを眺めながら、ひとりでぼんやり過ごした。喫茶店がなかったら、わたしたちはおそらく少年少女のままだったはずだ。

今で言う、コンビニ、カラオケボックス、カフェ、ヒーリングサロンのもつ利点を総合的に持ち合わせた場所だった。

今の喫茶店は、ちょっとちがう。ちがうけれど、外出時に喫茶店と見ると、時間のゆるすかぎり、入ってみたいのがわたしの性分なのだ。

そこで、なにをするかと問われれば、ただコーヒーを飲み、ぼんやりするだけなのだが。

個人経営の喫茶店には、ほとんどの場合、思い込みの強そうなマスターや無愛想なウエイトレスがいて、愉快的な雰囲気がある。旅先であれば、ちょっとした地元情報を耳にすることができるし、思いがけない会話を楽しむこともできる。しかし何よりの収穫は、自分たちが喫茶店を営む者であることを忘れさせてくれる、粋なひとときに出逢ったときだ。